

石岡繁雄さんの回想

大野 治夫

石岡繁雄さんのご逝去の知らせを8月16日の朝、新聞で知りました。

私は大きなショックを受けた。「エエッ」と叫び声を発して家人を驚かせた。

1950年来の私の回想が、次々と脳内を過ぎていきました。

石岡さんへのお悔やみの深い思いと、私の青春期の一步一步が、次々と思い出されます。その時期の、石岡さんを中心とした人々との交流は、私の成長一半ば甘く・半ば苦しい一我生涯に大きな影響を与えてくださいました。

昭和26年(1951年)私は、愛知県津島高校に入学し三年後卒業しました。

石岡さんとの最初の出会いは、その津島高校での「屏風岩正面初登攀」の記念講演会の場面でした。入学後の高校生活は私にとって退屈な日々でしたが、石岡さんの屏風岩登攀時のお話は、私にとって大きな印象を残したものでした。その内容には、高校時代の少ない感動を味わいました。登攀途中で若い松田さんが、繰り返し岩角にわっぱをかける作業を、豆を噛りながら待っていたこと。石岡さんの話し声がまだ耳元に残っているようです。そうして高校3年生の時には、石岡さんの弟、若山五朗さんと同じクラスになりました。五朗さんは国体の山岳に愛知県代表で参加されました。高校山岳部の顧問教官(神谷先生)が担任でしたので、授業の都度その様子を聞きました。お話を伺いながら山々に興味をそそり、20歳代になって繰り返し鈴鹿の山々に出かけたキッカケを、このお話を聞き山行きの魅力を私は感じはじめていました。たまたま1954年春、高校卒業後、私は名古屋大学事務局に就職しました。暫くして、学生部の厚生課学資係長に石岡さんが勤務されていることを知りました。

1955年1月2日、突然若山五朗さんが前穂高東壁で登山中にナイロンザイル切断事故のため行方不明になられた(夏になり死亡が確認された)と新聞が伝えました。高校卒業後の最初の同級生の事故死は大きなショックでした。見越のご自宅へ数人の同級生と悲しみの告別式にも参りました。

その後、名古屋大学の在勤中、石岡さんに連れられて『愛知川源流』の沢歩き、鈴鹿の御在所岳・前尾根での岩登り、藤内壁バットレス第一・第二ルートの登攀等、岩稜会の人達にもご一緒にザイルの扱い方から、両手、両足の岩への置き方

等々、岩登りのイロハを教えてくださいました。まだ我が家には当時の写真が遺されています。名古屋大学では、石原さんも学生部に勤務されていました。須賀先生が学生部長の折には、職員のリクレーションで朝明ヒュッテに泊まり、愛知川源流に24～25人の職員が参加した楽しい沢登りでした。

私が1962年転勤で文部省に移り、その後お目にかかる機会もありませんでした。

1979年前後、日時の記憶が定かではありませんが、東京の虎ノ門病院のロビーで石岡さんを偶然お見かけして懐かしく、少しの時間でしたがお話をしたのが私と石岡さんの最後の機会でした。その後、恵比寿の古本屋で探していました『穂高の岩場1』『穂高の岩場2』の2冊を求めることが出来ました。

これらが、私が石岡さんを偲ぶ背景です。

昭和30年代（1955年頃）名古屋大学の本部は、まだ名古屋城跡にありました。石岡さんは、八事日赤病院前の自宅からお城跡にある名古屋大学事務局まで、長距離を自転車で通勤されていました。若山五朗さんのナイロンザイル切断問題を井上靖が『氷壁』に書きましたが、当時石岡さんは、その原稿を事前に読んでいられました。1960年ごろかと思いますが、夕方自転車で自宅に帰られる石岡さんと名古屋城跡の堀脇を二人で歩き、若山五朗さんの津島高校での思い出を語りながら歩いていました。名古屋市役所前でバスに乗るためにお別れする折でした。石岡さんは風呂敷包みを大切に抱えて「大野さん、五朗の問題があつて、こうして井上さんの原稿を毎日持ち歩いているんです。僕が途中で襲われる危険もあつて、毎日の自転車通勤の道順を変えながら通っているんですよ」と苦笑しながら話されたことは、石岡さんの注意深い強い意志を持ち合わせた人としての印象として、私の記憶から抜けないでいます。

私の独り善がりな感情を書き綴ることになりました。お許し下さい。

その石岡さんを私達は喪うことになりました。心からお悔やみ申し上げます。石岡繁雄さんから若山五朗さんへ岩稜会から石原さん、鈴鹿の山々＝御在所岳＝藤原岳と一一、不思議な『縁』だったと思います。

先年、津島高校の同期の友人達と穂高の山々を訪れ、上高地から「五朗ちゃん」と大声で叫びました。もう一度、今年の秋には、今度は「五朗ちゃん」と共に「石岡さん！石岡さん！」と、大声で叫び、心からのお悔やみを述べに穂高を訪れた

いと思います。

梓川の美しい流れを――心に遺し――旧き友人へ――心からなるお礼と敬愛を捧げます。

2006年8月19日

大野 治夫